

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



アメリカから贈られた花水木

九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 6 3

2008(平成20)年5月5日(月)発行

<1951(昭和26)年5月5日は「こどもの日」で、児童憲章が制定された日>

日本国憲法に従う児童憲章は、総則3条、各論12条。

「すべての児童は、心身ともに健やかに生まれ、育てられ、その生活を保障される」

「児童は、人として尊ばれる、社会の一員として重んぜられる、よい環境のなかで育てられる」



郡山の工場へ動員生徒を引率

原町区桜井町 鈴木千代子

私は一九一九(大正八)年十一月生まれで、今年八十九歳になり、夫、子供、孫に囲まれ、幸せな日々を過ごしております。

母校原町女学校の教師に

思えばもう六十六年も前の話ですが、昭和十七年四月、私の母校である原町高等女学校教師として着任と同時に、新入生一年一組の組主任となり、私の職の夢かなった喜びとともに、厳しい現実にとまどう毎日でした。そして二年、三年と担任は持ち上がり、自分の職業に誇りと希望を抱きつつ生徒の指導に励みました。

昭和十九年十月動員へ 十四、五歳の三年生百二十名

やがて、太平洋戦争が日増しに激化してきた昭和十九年十月、原町高等女学校三年生に学徒動員の命令が下ったのです。当時十四、十五歳の可憐な少女たち百二十名が、学校長半谷虎雄先生の教訓だった「大和なでしこの精神」を胸にいただき、十月十四日、郡山市の日東紡績富久山工場に出動したのです。

○鈴木千代子さんは、前回の「私の戦争体験」の阿部信子さんの恩師で、郡山市の工場へ、原女百二十名の動員生徒を引率された先生の一人です。

私は遅れて翌年一月郡山へ

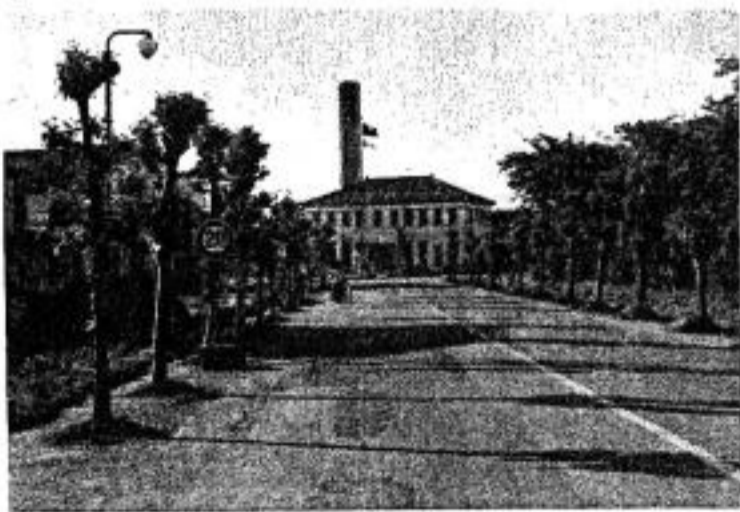
私が郡山に派遣されたのは、生徒から三カ月遅れの二十年一月で、多少気楽な旅立ちで、乗車券の購入には制限があり、特別に知人に依頼して手に入れました。朝5時の汽車に乗り、生まれ初めて郡山駅に下車すると、降り積もった雪が歩道の脇に一メートル位ありました。膝下まであるゴム長靴をはいて工場へ向かい、幸いバスに出会い、富久山工場まで乗ることができました。バスの窓からの景色は、降り積もった雪に太陽が輝いてとてもまぶしく、まさに一面の銀世界でした。工場へは午後三時ごろ着きました。正門の守衛さんに受付を済ませ工場に入ると、建造物の壁は墨流しの模様で黒く偽装され、ガラス窓には紙貼りがしてあり、軍需工場の物々しさを感しました。寮に案内され、先に引率していた目迫豊先生と松崎(大島)節子先生にお会いし説明や指導をいただき、早速目迫先生が生徒達の仕事の現場へと案内してくれました。

生徒の働く姿に言葉も出ず

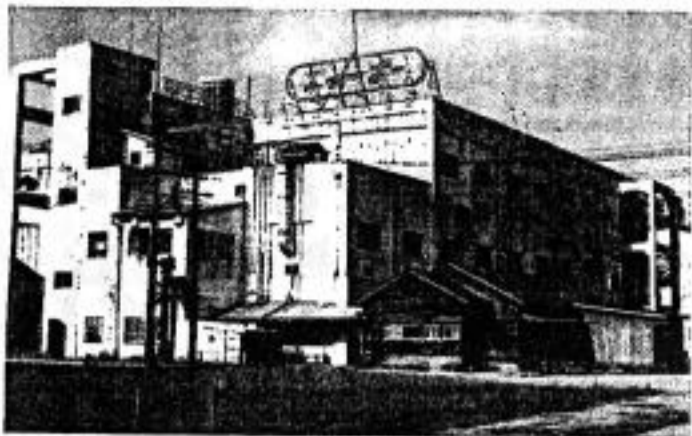
紺色のスフサージの作業服に身をこめた生徒たちの、きびきびと働いている姿に接し、懐かしさを感じ、対面なのに安堵といじらしさを感じ、言葉が出ませんでした。心の中で「ご苦労様」と、ただ頭が下がっているだけでした。

この工場に学徒動員されていたのは、他に磐城高等女学校と川俣工業学校の二校でした。原女生も顔見知りになり、苦しい中にも交流があつたようです。

私の毎日の任務に、生徒から頼まれた買い物や常備薬の購入で、町へ出かけることも多々ありましたが、でも工場内で生徒たちの作業現場の巡視が最も大事で、生徒一人ひとりの健康状態などもみましたが、その任務の方が楽しかったです。(裏面へつづく)



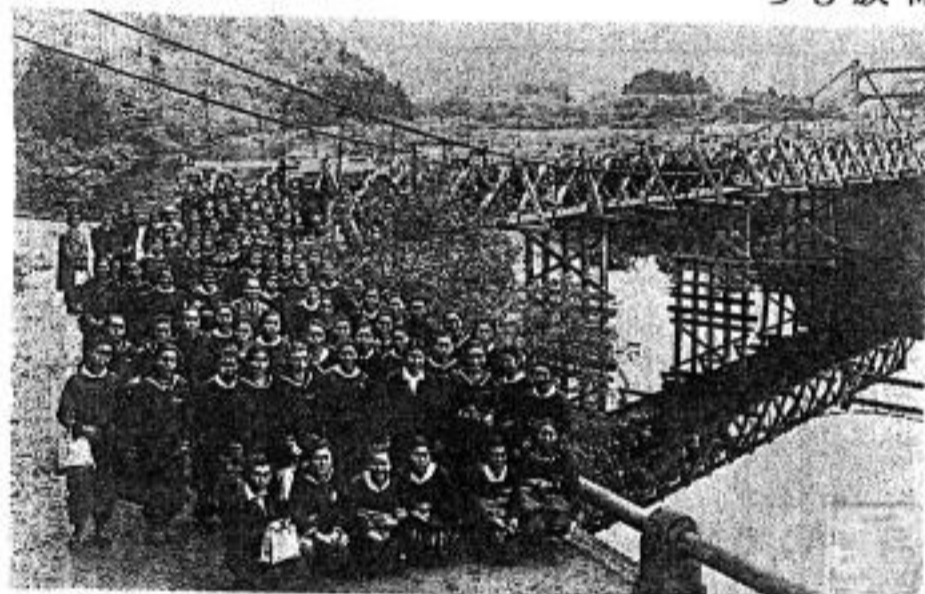
▲国道288号線沿いにある郡山市日東紡績富久山工場正面。動員された原女第17回生120人は、終戦の年の4月12日、この工場に米軍のB29六十機の激しい空襲にあう。



▲原液工程工場。4月12日の空襲の時、この建物の中の大きなタンクの下にもぐり込み助かった原女生もいます。現在も当時のままということです。



▲工員さんが出征する時の記念写真。スフ検査員と原町女学校動員生。



▲戦争も終わり平和がもどった昭和21年秋の遠足。原町区石神、新田川にかかる木造の栢（かや）ノ木橋にて。鈴木先生は最前列の左端です。

苛酷な重労働に耐えて

紡績工場ですから、生徒たちは悪臭や騒音に悩まされ、厳しい寒さに耐え、薬品で手は荒れたりしていました。最も苛酷で気の毒な仕事で私の胸を痛めたのは、耐火レンガやガラス繊維製造場でした。薄暗い穴蔵のような所で、汚れた作業衣に防空頭巾を被り、一輪車に粘土を積んで運んだり、型に入れた粘土を窯に入れ、ほこりにまみれ、顔は砂ぼこりにまみれ、目だけは威嚇感さえ感じました。窯場の真つ赤な炎に恐怖を覚え、その熱さと裏腹に、風よけもない野外の北風に煽られ身を切る寒さに耐えながら、ガラス繊維を整理している生徒もいて、可愛そうでなりませんでした。

作業は午前八時から午後五時まで、成長盛りの生徒たちです。食事に時間をなれば、一目散に食堂に入ります。一膳の井飯で、時には白米飯もありましたが、大根飯やさつまいもやその蔓（つる）の入ったご飯、又はうどん粉の入ったご飯やきゅうりの入った味噌汁に梅干しが普通だったことを覚えておられます。常にひもじい思いであつても、戦争に勝つまではと青春も味わえず頑張っていたのです。

家からの小包に大騒ぎ

時には故郷から小包が届き、部屋中大騒ぎになることもありました。保存食の大豆や米を炒ったものや、それに砂糖をからめた手作りの菓子、干しいも、干し柿、餅など懐かしい、家族の愛情が感じられるものばかりです。おそろ

蚤を煮沸して退治

く親や家族は、自分の食を減らして子供のために送ったと思いません。生徒たちも皆で仲良く分け合つて食べていました。夜八時過ぎまで夜学がありました。疲れて居眠りになり身は入らず、その後の入浴も一週間に二、三度で、大勢なのでお湯も少なくなりました。最後のお湯も少なくなりました。最後のお湯も少なくなりました。最後のお湯も少なくなりました。

昭和二十年四月十二日 郡山市の大空襲に遭う

昭和二十年四月十二日、午前十一時頃、アメリカ軍のB29の爆撃をうけ、工場は壊滅、死者百二十一人、負傷者二十七人の大空襲でした。幸い、原女生に死者はなく、負傷者も数名で、本当に不幸中の幸い、神のお助けと思わざるを得ませんでした。命からがら逃げまわつて避難し、野宿で一夜明けかけて工場に戻り、即、原町へ帰宅の運びになったのです。（前回掲載、阿部信子さんの「私の戦争体験」参照）

戦争を後世に伝えたい
このような数々の苦しい体験を生んだ悲惨な戦争を、将来とも決して繰り返してはならないと後世に伝えるのが私たちの任務であると思っております。

（昭和六十年発行）原町女学校第十七回生の郡山空襲体験談集『学徒動員から40年』より

これまでの「私の戦争体験」 1回早坂吉彦・2回鈴木丑太郎・3回星千枝・4回相良利信・5回佐々木孝・6回遠藤昌弘・7回佐藤ヒロ子・8回松本道子・9回菅野清二・10回中野目利次・11回荒功雄・12回佐藤邦雄・13回金井武・14回石塚京子・15回門馬政彦・16回阿部信子（敬称略）ご感想などお寄せください。